

二つの埋葬
——アンティゴネ像管見——

丹下和彦

I

ポリュネイケスは2度埋葬された。なぜ2度埋葬されたのか。2度目の埋葬がアンティゴネの手によるものであることは、まず確実である。しかし最初の埋葬のほうは誰の手によるものか、劇中に確とは示されていない。やはりアンティゴネなのか。あるいは妹のイスメネであろうか。それともそれ以外の誰かなのであろうか。それにしてもなぜ2度の埋葬なのか。

ソポクレスの悲劇『アンティゴネ』で展開される悲劇的事件は、ポリュネイケスの埋葬にその端を発する。ポリュネイケスは父オイディプスの死後、テーバイの覇権をめぐって兄エテオクレスと対立し、国を出てアルゴスに遁れていたのが、アルゴス王アドラストスの後援を得て祖国テーバイに反攻する。テーバイ側はこれを撃退するが、このとき王エテオクレスは攻撃軍の七将のひとり弟のポリュネイケスと刺し違え、ともに果てる。

それが昨日のことである。一夜明けた今朝テーバイの君王の地位にはふたりの兄弟の叔父クレオンが就き、終戦後の処理に当たっている。その最初の仕事はポリュネイケス埋葬禁止令の布告であった。兄エテオクレスは祖国を護って戦った末に斃れたゆえに、最大限の榮譽をもって葬送の儀を執り行う、しかし弟ポリュネイケスは祖国に弓を引いた逆賊ゆえに、屍は斃れたまま放置し、禽獣の餌食となるに任せる、もしこれを埋葬しようとする者があれば誰にせよ死罪をもって罰せられる、というものである。この布告をふたりの兄弟の妹アンティゴネはいち早く聞きつける。彼女はこれにどう対処しようとするのか。ここから劇が始まる。

始まると舞台——舞台は王宮前の広場と設定されている——にはアンティゴネと、その妹のイスメネがいる（プロロゴス）。すでに兄ポリュネイケスの埋葬を決心しているアンティゴネは、仕入れた情報を妹イスメネに漏らした上で埋葬行為への協力を依頼する⁽¹⁾。しかしイスメネは禁止令を破ることを恐れて協力を渋る。事は不首尾に終わる。アンティゴネは己ひとりでも実行することを言明して舞台から去ってゆく。イスメネも舞台を去る。

テーバイの長老たちから成る合唱隊の入場（パロドス）があったあと、次に舞台に登場するのは新しくテーバイの王となったクレオンである。登場したクレオンは、改めてポリュネイケスの埋葬禁止を厳しく言い渡し、合唱隊の長老らに禁止令執行のための協力を要請する。ところへ、禁止令実行のためポリュネイケスの屍の見張りをしていた当番兵が使者となって王クレオンに変事出来を注進に及ぶ。最初の当番兵が見張りにつくより前に、すでに誰か屍を埋葬した者があるというのである。ただ妙なことに、あたりを掘り起こした跡もなく、土を運んできた車の轍の跡もないのに、屍には薄く砂がかけられている。そして野獣や野犬が荒した痕跡も見えぬ。しかしとにかく誰かが埋葬した。これが第1の埋葬である。

誰かが埋葬した。ここでわれわれは直ちにアンティゴネを思い浮かべるであろう。これは自然である。先ほどのアンティゴネを知っているのであるから。だが目撃者がいない。容疑は濃いけれども確定はできない。ひょっとすると他の人間がやったのかもしれない。その可能性はゼロではない。そしてこの疑惑を増幅させるものがひとつある。このあともう1度埋葬がなされ、しかもそれがアンティゴネの手でなされるという事実である。このことは、現行犯逮捕されたアンティゴネを連れて先ほどの番兵が再び登場してくる第2エペイソディオ（384ff.）で明かにされる。

第1埋葬の事実を報告したあと、番兵は再び部署に戻って見張りについていた。

そのまま何刻か経ちました。ついに輝く日輪が中空にかかり、照りつける

熱が上がってきました。と、そのとき突然大風が吹いて、大地から突風を巻き上げた....略....しばらくしてこれがおさまると、そこにこの娘がいて大声に泣きわめいていたのです....略....そしてすぐに乾いた砂を手ですくってきてかけ、確かな鍛えの青銅の水差しを高くかけて、ぐるりぐらりと輪を描きさま、都合三度供養の水を遺体の上に注ぎかけました(415-31)。

これが第2の埋葬である。なぜアンティゴネは兄ポリュネイケスの埋葬を2回に分け、しかも時間を置いて行うという不自然なことをしたのか⁽²⁾。これがひとつの問題である。いや、それよりも第1の埋葬は果してアンティゴネの手によるものだったのか。2回に分けられた不自然さゆえに、逆に第1の埋葬はアンティゴネ以外の者の手でなされたとも考えられるのではないか。第1の埋葬がなされた時点では、それがアンティゴネの手によるものと考えるのは自然なことであった。しかし第2の埋葬がアンティゴネによってなされたあとでは、第1の埋葬の為手をアンティゴネと特定することが逆に不自然になってくるのである。そこでまず、第1の埋葬の為手を特定することがわれわれの課題となってこよう。第1の埋葬は果して誰がやったのか。

II

神がやった、という説がある。アダムズ、ファーガソン、マコールらがそう唱える⁽³⁾。確かに第1の埋葬には神秘に包まれたところ、謎めいたところがある。まず目撃者がいない。当番兵が見張りにつく時間を見計らったかのように、うまく間隙を縫ってなされている。しかもその埋葬の様子が神秘的である。

....鶴嘴をふるった跡も鍬で掘った跡もありません。土は乾いて固いものですから砕けぬまま、轍の跡も残ってはず、犯人は何の痕跡も残しており

ません....略....埋葬されたといひましても、別にお墓がつくられたわけではなく、ただ穢れを払うつもりなのでしょう、砂が軽く上に振りかけられていただけだったのです（249-56）。

ひょっとすると、これは人間以外のものの手でなされたのかもしれない。この疑惑を代表するかのよう、報告を側らで聞いていた合唱隊のテーバイの長老たち、世故に長けた長老たちも、次のように言う。

殿よ、最前からずっと考えておるのですが、これはひょっとして神さまのなされたことではありますまいか（278-79）。

一瞬われわれもそうした気になる。しかしわれわれはまた思い返す。これはあくまで疑惑であつて、事実とする必要はないのではないかと。確かにこのように神が劇中の事件に介入する例はギリシア悲劇には少なくない⁽⁴⁾。しかしもしこれを神の仕業だとすれば、これはそうした例の中でもかなり大幅かつ具体的な介入ということになる。単に薄く砂がかけられているだけではなく「お供え」（247）までしてあるというのだから⁽⁵⁾。ただこのあとアンティゴネは、クレオンの追求に対し自己の行為を「書かれざる法＝神の法」に則つてのものと弁明する。その弁明に、この神秘に満ちた第1埋葬、また合唱隊の長老たちの言葉が強力な援護の役を果たすことは確かである。だがそのためにこの介入が事実である必要はない。そうではないか、という思惑だけで充分である。クレオンに対してはその思惑だけで充分な圧力となるのである。逆に、事実神が介入したとすると、それはアンティゴネにとって強力な後楯となるようであり、却つてアンティゴネその人の人間性を阻害することになりはしないか。アンティゴネもそこまでは求めないはずである。これは人間界の出来事として処理されねばならない。

今ひとつ、これはイスメネがやったとする説がある。ラウズがこれを唱える⁽⁶⁾。これは些か魅惑的な説である。イスメネという人物は劇中出番が少

なく（そして前半の 576行を最後に姿を消してしまう）、目立たないけれども注目すべき人物であることは間違いない⁽⁷⁾。もしイスメネがやったら、彼女はこの劇に大きな役割を持つことになる。ラウズはその証拠として次の 2 行を挙げる。

あの仕事、わたしがやりました（536）。

罪を犯したという点では、わたしたちふたりとも同罪ですわ（558）。

いずれもイスメネの台詞である。536 行の「あの仕事」とは、第 1 埋葬を指す。しかしこの行の後半には「もしも姉さんがそれを認めてくださるならば」との留保条件がついている（ラウズはこれをなぜか落して議論している）。この後半部は、単にイスメネの性格の優柔不断さを表すもの⁽⁸⁾ではなくて、むしろ姉への同情もしくは逆に己を利するための欲から無実の罪を買って出たものと解されはしないか。これがアンティゴネに否定され拒絶されると、次に彼女はこう言うのである、「あなたがひどい目にあっているときにわたしもその苦しみを頷ちあえるならば、それはむしろ嬉しい限りですわ（540）」と。558行に言う「罪」というのも、第 1 埋葬すなわち「人の法」を犯した罪ともとれるが、また埋葬を拒否することによって死者に対する、あるいは「神の法」に対する罪を犯したともとり得るのである⁽⁹⁾。

イスメネはなんとかしてアンティゴネを助けようとして第 1 の埋葬をしたのだ、とラウズは言う。それならば最初からアンティゴネの協力要請に応えて一緒にやればよかった、と反論されよう。そもそもプロロゴスに於けるイスメネには、そのあとすぐ埋葬へと走るような様子は微塵もない。それでいて埋葬したとすれば、観衆やわれわれにはその意外性が興味深いが、そうするのはイスメネ像への偏向というべきであり、またそこまでの変貌を許せば、それはギリシア悲劇のプロロゴスの役割を些か逸脱することになるだろう。むしろイスメネのこの姿は、1 度は乗ることを拒否した埋葬という「バス」に、

乗り遅れたことを後悔してあわててあとを追いかけている、というそんな図式を髣髴とさせる。

今ひとつ、もし第1埋葬がイスメネの行為とすると、イスメネ像の劇中に占める位置割合は些少のものではなくなる。そしてその分だけアンティゴネ像の比重が下がることになる。彼女は妹の行為（埋葬）を一切知らぬまま、得々として「神の法」を説くことになる。これは道化ではないか。それとも彼女はすべて承知の上で、妹を救うためにわざと邪慳にしているというのか。これもまた興味をそそられる考察であるが、果して彼女はそれほどまでに寛容であろうか。少なくともプロロゴスの姿からはそのような彼女は予想できない。彼女らふたりの関係は、プロロゴスに於けるものがそのままこの第2エピソードにも持ち越されている、と解するのが妥当であろう。

イスメネは埋葬などしなかった。姉と別れたあと、ひとり館内で姉の身の心配をしていた。それだけである。

かくして、第1埋葬の為手はどうやら神でもなくイスメネでもないようである。となるとアンティゴネ自身がやった公算が大きくなる。プロロゴスでの妹イスメネとの遣り取りを聞いたわれわれには、それがいちばん自然に思われる。その上われわれは、彼女自身そのことを認めたという情報を実は得ているのである。

さっそくにわれらは、前後2回にわたる不埒な行いを問い質してみました。するとこの女、一切を否定せず、認めました（傍点筆者）（434-35）。

これは番兵の報告の一節である。そしてこれを聞いたクレオンが直接アンティゴネに問い質すと、彼女はきっぱりと答える、「やったと申し上げます。やらなかったとは申しませぬ（443）」と。「前後2回の不埒な行い」（原文を直訳すれば「前の行為と今度の行為」）とはもちろんふたつの埋葬行為を示す。アンティゴネは「前の行為」すなわち第1埋葬も自分がやったと確認しているのである（これを、上に述べたような妹をかばうための嘘ととる

のはやはり苦しいのではないか)。番兵の報告だけではない。彼女自身も口を添えてクレオンの前で確認している。これ以上に確実なことはないであろう。

今ひとつ、彼女の行為であることを示唆する箇処を挙げておこう。上の番兵の報告の少し前の処に次のような件がある。

娘はむき出しにされた遺体を見て嘆きのたけを声高にあげ、またそんなひどいことをした者らに向けて呪咀の言葉を吐いた(426-28)。

第1の埋葬をクレオンに報告した番兵は、クレオンの厳命で再び見張りの部署に戻り、屍にかけられた砂を取り払う。上の引用は、第2の埋葬に現れたアンティゴネがそれを見た時の状況描写である。ここには第1の埋葬を為した者にしか言えぬ言葉、できぬ行動が描写されている。かけた砂が取り払われて屍がむき出しにされたことを怒り得るのは、前には砂がかけられていたことを知っていた者、すなわち砂をかけた当人だけのはずである。彼女は自分の為た(第1)埋葬行為が無にされたのを発見して怒ったのである。

かくして、第1の埋葬も第2のそれもアンティゴネの仕業ということになる⁽¹⁰⁾。ではなぜ彼女は2度も埋葬行為をしたのか。

III

ジェブはこれを、第1の埋葬で仕残した「灌奠の儀」を取り行うことによって埋葬の儀式の完璧を期すためと考えた⁽¹¹⁾。たしかに第1の埋葬では屍に軽く砂をかけた程度であったのが、第2の埋葬では、彼女は「確かな鍛えの青銅の水差しを高くかかげて、ぐるりぐるりと輪を描きさま都合三度供養の水を遺体の上に注ぎかけ(430-31)」て、灌奠の儀式を行っている。

しかしこの灌奠の儀は、埋葬の儀式に必ずしも必要不可欠のものとする必要はない。兄ポリュネイケスの慰霊のための儀式は、第1埋葬だけでも充

分であるとも言えるのである。そもそも第1埋葬自体がすでに“象徴的埋葬”となっている。プロロゴスでアンティゴネが妹に依頼したのは、「屍と一緒に手で持ち上げて kūphieis (43)」運び、他の適当な場所に埋葬することであった⁽¹²⁾。それを拒否されたため埋葬は現場で済まさなければならなくなる。つまり埋葬は仮の、象徴的埋葬にならざるを得ないのである。ならばそれは1回でよいはずである（象徴的行為が何度もあることはおかしい）。儀式はこれで終わったと見るべきであろう。

しかし今、仮に「灌奠」が必要不可欠であるとしよう。ならばなぜアンティゴネは第1埋葬の折にそれを用意しなかったのか⁽¹³⁾。忘れたのか。それにしては忘れ物を取って帰ってくる第2埋葬まで、時間がかかり過ぎよう。またアンティゴネは忘れ物をして、ソポクレスが忘れ物をするのではないはずである。作者はわざと忘れ物をさせたのである。そう考えなければならない。キトーが言うのがそれである。アンティゴネはなぜ戻ってきたか、と問うてはならない、作者はなぜアンティゴネを再び兄の屍の処まで戻したのか、と問うのが正しいと⁽¹⁴⁾。2度の埋葬は作者ソポクレスが意図したものであった。その理由は何か。なぜ2度か。また、第1、第2それぞれの埋葬の持つ意味は何か。

われわれは、作者の意図に沿うべく、この2度の埋葬の意味を劇全体との関連の中で探らねばならない。まず、第1埋葬の持つ意味は何か。それを探るには登場人物にそれが与えた影響を量るのがひとつの方法である。

クレオンの場合から始めよう。

第1埋葬の報告を受けたとき、クレオンは激怒した(280ff.)。禁令が無視され、己の權威が蔑ろにされたからである。そもそもあのような禁令を布告した彼の政治的立場の基本は次のように言われている。

それに自分の祖国より身内の者を大切に考えるような輩をば、わたしは軽蔑する。わたしには、すべてをみそなわす神ゼウスもご照覧あれ、安寧に代わって市民らに忍び寄る破滅を黙って見過ごしはできないし、また祖国

に仇なす輩を同朋とみなすこともできない。それは、われらを救うのはこの国であること、そしてこの国という船に乗り合わせて恙なく航海してこそ、われらは本当の同朋をみつけだせるということを承知しているからだ（182-90）。

これは為政者たるにふさわしい態度、つまり私よりも公、まず国事行為を最優先させる立場である。ゆえに祖国に仇なす輩ポリュネイケスは徹底的に弾圧されねばならない。彼のこの態度は頑なである。「ひょっとしてこれ（埋葬行為）は、神のなされたことではないか」と合唱隊が言うときも、そんなはずはないと彼は激怒して否定する、「それとも神さま方は悪人どもを嘉し給うとでもいうのか。そんなことはあるはずがない（288-89）」と⁽¹⁵⁾。

しかし以上はあくまで公式の立場表明、いわば建前であって、その裏には現実的また私的な事情が潜んでいる。予期せぬ事態の発生によって計らずも王位に就いた彼は、政権基盤の弱さに対する不安と気負いから、埋葬報告に対し過剰に、しかも本筋をはずれた反応をすることになる、「だが市民らはこの件では最初からあまり従う気がなくて、わたしに隠れてぶつぶつ言うておった。頭を横に振って、言うことを聞いて軀にちゃんと首を入れずにな。あれは、そういった輩から見張りの者らが鼻葉 *misthos* をきかされてやった仕業だ、わたしにはちゃんとわかっている（289-94）」と。

ここには、政権争いに絡んでの人間の金銭欲という極めて現実的な、またそれだけ次元の低い理由付けが登場してくる。こうした彼の現実的なものの見方は以後も変わらない。いやむしろそれは益々露呈されてくると言ったほうがよいかもしれない⁽¹⁶⁾。彼が第1埋葬を自らの主権への重大な侵害とみて、これを敵視するのは正しい。しかしそこには私的かつ現実的感覚が加わって、その態度を屈折しより硬化したものとさせている。この少しあと、クレオンはアンティゴネと直接対峙することになるが、その時「神の法」で武装したアンティゴネに対するクレオンの姿は、決して単なる“人の法の権

化”ではない。それは、いま上で述べたようなさまざまな現実感覚が絡み込んだより複雑なものとなっている。そしてこうした複雑化したクレオン像を作り出した、あるいは発き出したのは、第1埋葬についての番兵の報告であった。建前だけでは量れぬ、屈折し複雑化した彼の暗部を剔抉せしめたこと、しかもアンティゴネとの対決前にそうせしめたこと、これが劇中での第1埋葬存在のひとつの役割であり、効用であったのである。

さて、第1埋葬の存在とその報告は、合唱隊に対しても大きな影響を与える。

すでに述べたように、報告を聞いた合唱隊は、それは神の仕業ではないかと反応する（278-79）。そしてこれを聞いたクレオンがその怒りを増幅させることになる。したがって、それは合唱隊への影響というよりは、合唱隊を介してのクレオンへの影響と言うべきであろう。しかもテーバイの長老たちから成る合唱隊の意見は、凡そ市民一般の公約数的意見とみてよい。それにクレオンは反発する。この反発が、今後クレオンをより一層依怙地にさせ、その立場を孤立させてゆく恐れは充分にある。事実、のちにアンティゴネと対峙したクレオンは、この合唱隊の言葉から吹き込まれた先入観ゆえに、アンティゴネの唱える「神の法」を絶対認めようとしなない。その意味で、この合唱隊の一語は劇の展開に重要な一石を投ずるものと言ってよいであろう。

さらにこの合唱隊の一語は観客にも少なからぬ影響を及ぼす。すでにプロロゴスを見ている観客は、第1埋葬の犯人がアンティゴネであることを知っている。目撃したわけではないが、極めて蓋然性の高い推測としてである。だがこの合唱隊の一語にはその蓋然性を一瞬揺るがす力がある。「ひょっとすると……」という思いが観客の胸中に頭をもたげる。これは少しあとにアンティゴネ自身の告白によって否定されるが、一瞬浮かんだこの思いは、完全に払拭されぬままのちのちまで残ってゆく。それは、アンティゴネの主張する「神の法」と微妙に結びついて、観客の心にアンティゴネ像肯定の印象を強く刻みつけるという結果を生むことになるのである。

ところで、この第1埋葬はイスメネにも何らかの衝撃を与えたはずである。

アンティゴネから埋葬協力を依頼された折、彼女はこれを拒絶した。そしてこう言って姉と別れた、「おできになるならどうぞ。でもその気はあってもどうにもならないわ（90）」と。それが「できた」。その報に接したとき彼女は何を思ったであろうか。第2の埋葬がなされ、逮捕されたアンティゴネと再会するまでの間、イスメネの消息は不明である。ただこれより前に、彼女は館の中で狂乱状態にあったことが知られている。クレオンが言う、「あの娘もここへ呼んでこい。館内でたしかに見かけたぞ。狂いたって、気の赴くまま、どうにもならん様子だった（491-92）」と。この狂乱は何を語るのか。姉の身の上の心配か、または嫉妬か、あるいは英雄的行為に乗りそこね、あとに残された者の焦慮か。何も書かれていないゆえに、正確なところは不明である。ただ、この「狂乱」が第1埋葬の結果のひとつであることだけは確かであろう。

最後に、この第1埋葬が大きく影響するはずの人物がいる。アンティゴネ自身である。アンティゴネの場合はどうか。

IV

第1の埋葬はアンティゴネ自身にとってどのような意味を持つのか。

プロロゴスに於いて協力要請を妹に断わられたアンティゴネは、憤然として舞台をあとにする（93f.）。そのあと彼女はひとりで埋葬に出掛けた⁽¹⁷⁾。時刻は夜明け直後。偶々（あるいは狙ったとおりか）見張り番の到着前で、無警戒であった。彼女は誰に咎められることもなく屍に近づき、埋葬を済ませることができた。ただ屍に砂を薄くかけただけの、簡単な型どおりの埋葬であった。そして埋葬後、恐らくはあまり時間をおかず彼女は戻ってきている。番兵にみつからなかったのであるから。時間にそう余裕があったはずはない。故意か偶然かはわからぬが、とにかく彼女は埋葬後あまり時間をおかずに、そして番兵にみつかることなく戻ってきた。このことは何を意味するであろうか。

忘れ物をしたという説がある。なるほど、のちの第2埋葬時には、この時
忘れたとされる「灌奠の儀」が行われている。そのための道具を取りに戻っ
た、そしてまた出掛けた（第2埋葬）——そうも考えられる。しかし忘れ物
を取ってまた埋葬場所へ戻ってくるのに、あまりに時間がかかりすぎている
（夜明け直後から正午頃まで）。いやそれより「忘れ物」という些か日常的
にすぎる次元の現象でもって彼女の行動を規定するのは、この場合ちょっと
そぐわないのではないか。今少し彼女の心理に即して考えるべきではないの
か。彼女は自らの意志で出掛けてゆき、そして自らの意志で戻ってきた。そ
れは、「忘れ物」というような外的要因に拠るものではなく、内的な意志あ
るいは衝動に拠るものであったと考えたい。彼女はこの行為が死罪に相当す
るものであることは先刻承知している。そしていざとなれば死ぬ覚悟もでき
ている。それは本望であるとも言っている（95ff.）。その彼女が戻ってき
た。忘れ物をしたから？　なんとうまい口実、また長閑な口実であろう。今
はもう正式な埋葬が不可能な事態であることは、皆（われわれも含めて）が
承知しているところである。象徴としてであれ、今は埋葬行為を行うことに
こそ意味がある。灌奠の儀の有無は問うところではない（第2埋葬で灌奠が
行われるのは、あれは逮捕のための形式づくりに外ならない）。それにまた
「忘れ物」はアンティゴネの人間性を却って貶めることになりはしないか。
現場へ着いたとき番兵がいなかったのは全くの偶然としよう。そこまで彼女
に故意を要求しなくともよい。偶然性はまた演劇の一大要素である。しかし
番兵の居ぬまに埋葬を済ませ、みつからぬまま戻ってくるところまで偶然で
ありうるだろうか。みつからずに戻るといふ点には意志が働いているとみな
すほうが意味があるのではないか。

彼女は恐くなったのだ。これでいい。だから番兵が到着する前に早々に戻
ってきた。もし死の覚悟が不変ならば、彼女はそのままそこに残って、やが
てやってくる番兵に逮捕されてもよかったはずである。逮捕されて、己の行
為の高貴なることをアピールすることができたはずである。だがそうせずに
戻ってきた。恐かったから。彼女は、自分でやった埋葬行為の結果恐怖を得

たのである⁽¹⁸⁾。

これには異論があるかもしれない。プロロゴスでの彼女は、兄の埋葬に関して死も辞さぬ熱意と決意とを表明していたからである。その姿と今の「恐怖」とは相容れぬと考えられよう。しかしわれわれは、いつの彼女も兄弟愛に燃え、「神の法」に殉死する英雄的女性であると考えer必要があるのか。プロロゴスで見せた強いアンティゴネは彼女の一側面にすぎぬ、とは考えられぬであろうか。もしも強いアンティゴネならば2回も埋葬は要らぬはずであり、もっと違った劇構成が考えられるはずである。但し1回目の埋葬を神の行為とみなすなら別である。神意の強調のため第1埋葬が企まれたと考えればよい。しかしわれわれは第1埋葬もアンティゴネによると考えた。とすると、このアンティゴネはただ強いだけのアンティゴネではない。見張りの目を逃げて戻ってきたアンティゴネである。だからといってしかしわれわれはこの姿を非難するのではない。自然な姿として受け容れるのである。

埋葬を終えて館へ戻ってきた（はずの）アンティゴネは、その後どうしたか。不明である。それについての情報は一切ない。館にいたかどうか不明である⁽¹⁹⁾。このあとわれわれが彼女についての情報に接するのは、番兵の第2回目の報告の中で第2の埋葬に現れた彼女の姿が触れられたときである。そこで彼女は正午頃再び屍の現場に姿を現し、灌奠の儀を行っている。この間約5～6時間が経過している。もちろん「忘れ物」を取って帰ってくるには長すぎる。この5～6時間は、一見まったくの空白時間である。それは何も告げてくれない。だがこの時間の終わりにアンティゴネが再び登場してくることによって、それは単なる空白時間ではなくなり、ひとつの意味を帯びたものと化す。第1埋葬から戻ってきたアンティゴネが次の第2埋葬へ出掛けてゆく、その準備時間となるのである。

第1の埋葬から彼女は恐怖を得て戻ってくる。そして館のどこかにうずくまりながら、今一度死の決心をして彼女は出てゆく（いわば満腔の意を込めて作者が送り出す）。その間の長い時間は、死をもう1度決心し直すための時間だとも言える。したがって、第1埋葬と第2埋葬とは決して同じものの

繰り返しては、両者は相異なるものである。それは単に「灌奠の儀」の有無の問題ではない。埋葬を行うアンティゴネがすでに同一の人ではないからである。

アンティゴネにとって、第1の埋葬は純粹に死者の霊を慰めるための儀式であった(74, 75)。しかも死者は兄である。いわばごく内輪の慰霊行為である(45)。そしてそこには、禁令を知り、それに驚き反発し、取るものも取りあえず駆けつけたという、切迫した面がある。

一方、第2の埋葬は、充分に計画されたと言って語弊があるなら、充分に覚悟の上でなされたものと言うことができる。番兵の見張っているなか、逮捕と死を承知で出てゆくのである。ゆえに逮捕されたあとも「彼女は何ら臆するところもみせぬ(433)」のである。今度は彼女は(第1埋葬のように)埋葬するだけではなく、埋葬を問題化することに意義を見出す。そのための理論武装もする。それが「神の法」である。いわゆる埋葬は、済んだ。慰霊の儀式は終わったのである。今度はその埋葬の是非をクレオンとの間で問題化すること、第2埋葬の最大の意義はそこにある。そのために彼女は死を賭して出掛けてゆく。むしろ逮捕され死刑を受けるために出掛けると言ってよい。そこに彼女は己を賭ける。長い空白時間はそのための準備期間であったのだ。長時間にならざるを得ないはずである。

ただもうひとつ別に、彼女が恐怖を克服して第2の埋葬に出掛けてゆく理由がある。それは、埋葬による名声の獲得と死による現世の苦勞からの脱出のためである。彼女は「寿命の尽きる前に死んでも、それはわが身の利得 *kerdos* (462)」, 「わたしのようにならぬ禍いにまみれて生きている者は、死んだほうが得 *kerdos* (464)」と言い、そして「あれ以上にわたし、世間のおひとからよくやったと噂 *kleos* されるような、どんなことがありまして、お兄さまのお葬いをしてあげること以上に(502-04)」と言う。彼女は、「神の法」遵守という高邁な理由だけで第2埋葬に出掛けたのではない。単なるヒロイズムだけではない。そこには現実的な理由も介在しているのである⁽²⁰⁾。むしろこうした現実的な理由こそが「神の法」の主張を強力にバッ

ク・アップしていると言えるのではないか。第2埋葬へ実際に出てゆかしめたのはこの現実的な理由のほうかもしれないのである。そしてこれはまた決して彼女の人間性を損うものではない。生身の人間として当然のことなのである。これもまたあの長い空白の時間のなかで、次第に彼女の心中に頭をもたげてき固まってきたものであろう。

このように見てくると、第1埋葬と第2埋葬とはその意味が全く違うもののように見える。第1埋葬は純粹に死者を慰めるための儀式である。第2埋葬は、埋葬という行為を現世での問題と化すため、そして己が死ぬための儀式あるいは手続きである。第1埋葬でアンティゴネは兄の霊を慰める儀式を済ませた。第2埋葬は、彼女はむしろ自分のために出掛けてゆくのである。埋葬行為の意味を問題化し、そして今度こそ死ぬために出掛けてゆくのである。

V

先にわれわれは、なぜ埋葬が2度も行われなければならなかったか、という問いを提出しておいた。「神の法」と「人の法」との対立というテーマを展開するためであれば、1回の埋葬（この場合第2の埋葬）で充分ことたりるはずだからである。ゆえに余計な（と思われる）第1の埋葬の意味が問われ、その行為者の名が詮索されることになった。上に述べたように、われわれはその行為者をアンティゴネとした。そしてその第1の埋葬の存在がアンティゴネに与えた影響を見ようとした。もちろん、この第1埋葬がアンティゴネのみならずクレオンに与えた影響も看過できない。それは“神がしたかもしれぬ”という謎めいた神秘性を帯びることによって、「神の法」と「人の法」との対立の図式の中で「神の法」を主張するアンティゴネに強力な援護力となり、それがまたクレオンの心理を大きく圧迫することになるからである。しかしそれと同時に、この第1埋葬の存在は（もちろんそれだけでなく第2埋葬と関連することによって）アンティゴネという人物の性格の幅を

広げ、深みを増すのに大きな働きをしていると言い得るのである。

最初からアンティゴネが神の定めた永遠の掟に殉ずる英雄的女性であるとするのは教条的に過ぎよう。クレオンが、最初の触れこみと裏腹に事態の推移とともに馬脚を露わし、正当な意味での独裁君主としての姿すら維持できなかったのと同様に、アンティゴネも硬軟織り交ぜた複雑な相貌を見せる。われわれはプロロゴスでのアンティゴネ、また第2埋葬後クレオンと対峙しまたイスメネと対峙したときの彼女の強い姿勢に気を奪われすぎるきらいがあるのではないか。いずれも舞台上にあつて強烈な印象を残すからである。しかし第1埋葬にまつわる彼女の行動に、われわれはその弱い一面を見た。ふたつの埋葬の間にはさまる空白の時間、そして舞台裏に隠れている彼女の姿に、われわれはそれを推測したのである。だがこのもうひとつの彼女の姿は、いつも舞台裏の推測の領域にばかりあるのではない。表舞台に立ったときの彼女もそうした一面を示さぬわけではないのである。806行以下の第4エピソード、アンティゴネ嘆きの場を一例に挙げよう。死刑は免れたものの、ほぼそれと等しい罰、洞窟内の牢獄に幽閉との宣告をうけて引き立てられてゆく彼女が、これを最後と嘆きの歌をうたう。その一節に、「わたしはこうして手を取られ連れてゆかれます。婚礼の歌も聞かず、嫁ぎゆけぬ身のまま、人の嫁となり子の母となる喜びも得られぬままに(916-18)」とある。また「ああ、お兄さま、あなたは不幸な結婚をなさったあげくに命を落し、そしてまだ生きているこのわたしを滅ぼしてしまったのです(869-71)」、さらに「わたしは地下に降りてゆくのだ、定められた寿命をまだ充分消化もし尽さぬうちに(896)」とうたわれる。「寿命の尽きる前に死んでも、それはわが身の利得(462)」と言い切り、あれほど埋葬と死に固執した彼女が、死を前にしてこう歌うのである。

またかの有名な 905 行以下のアンティゴネの台詞を挙げよう。そこで彼女は、自分が埋葬に固執した理由はごく私的なところにあつたことを明かす。すなわち、子供や夫を亡くした場合は市民の反対を押してまで埋葬することはしなかったろう、子供や夫は代替がきくから。だが両親がすでに死んでい

る今、兄弟の代替はもうきかぬ、つまりかけがえのない兄ゆえに埋葬に固執したというのである。これは、先に主張された「神の法」の無差別の絶対性（450ff.）とどれほど懸け離れていることであろう。「神の法」というのは、兄への特別な感情を公式化するための便法に外ならなかったことになる。それは人間愛を標榜する高邁なテーゼ（「愛を領けあう symphilein (523)」）ではなかったことになる。かくしてアンティゴネ像の純粹性を保ちたい向きはこの台詞に驚きうろたえ、この箇所（904-20）を後代の挿入として削除まで考える⁽²¹⁾。しかしわれわれは驚かない。削除もしない。第1埋葬後逃げ戻ってきたあのアンティゴネの姿を知っているからである。劇中一貫しているのは強いアンティゴネ像ではない。強弱ふたつの相貌を持つアンティゴネ像が一貫しているのである。

そのことは、彼女を見る第三者の眼が必ずしも一定していないことから窺える。ふつう主人公の与党的立場にある合唱隊も、本篇に於いては必ずしもアンティゴネに優しくない。第2埋葬後逮捕されてクレオンと対決するアンティゴネを評して、「この娘の気性ときたらまさに父親譲り、きついものだ。辛い目に逢うても屈することを知らぬ（471-72）」と言うし⁽²²⁾、また嘆きの場のこの彼女に対しては、「娘御よ、あなたはあたら蛮勇をふるったがために正義のいと高き宮居に激しく突き当たり、そうしてお父上以来の罪の償いをいま果たされるのだ（853-56）」、「でもあなたを滅ぼしたのは、結局自分勝手な怒りにすぎませぬ（872-75）」と痛烈な言葉を投げつける。そもそも禁令を犯して埋葬すること自体が、彼らにとっては「愚かな行為 mōros (220)」なのである。

一方、彼女の婚約者ハイモンが市中の噂として紹介するのは、これと相反するものである。市民らはアンティゴネのことを「あれほど立派な世に謳われて然るべき仕事をしたのに、全女性のうちでもいちばんひどい悪女として死んでゆく（694-95）」、「これほどの人間が至高の名誉に価せぬと、果して言えるでしょうか（699）」と噂しているというのである。

アンティゴネ自身も、クレオンとの対決場面では、己が行動に市民らも

賛成している、ただあなた（クレオン）を憚って口をつぐんでいるだけだ（504-05）、合唱隊だってそうだ（509）と強気に主張する。その一方で、しかし嘆きの場では、死んだのが兄でなく子供や夫であった場合は市民の意向に反してまでこんな苦勞を引き受けはしなかったろう（905-07）と言っている。あたかも自分の行為に眉をしかめる市民の存在を認めているかの如くに、それよりもまず彼女は、埋葬という己の行為を「愚かで無分別なもの *dysbūlia* (95)」と自ら規定しているのである。

つまり彼女の行為に対する第三者の反応も一定してはいないし、また彼女自身、己の行為に最後まで自信があるわけでもないのである。彼女の姿は内も外も不安定に揺れている。彼女は決して「神の法」の権化ではない。兄の埋葬には、「神の法」という大義名分のみならず己の利得も関係していたことは、前章末尾に言及しておいたとおりである。

VI

こうした不安定なアンティゴネの心を、しかし揺れながらも一本突き抜けるものがある。それは彼女の死への意志である。すでにプロロゴスで彼女は3度死への覚悟を口にする（72, 73, 97）⁽²³⁾。しかしこれは1度挫折しなければならない。それはすでに見たように、第1埋葬の折突然彼女を襲った恐怖ゆえである。プロロゴスで言明したとおりに兄を埋葬して立派に死ぬことは、ようしなかった。それが本望だったのにである。しかし彼女は再び死を決心して第2埋葬に赴く。以後その決心は揺らぎつつも変わらない。第2埋葬後イスメネと再び対峙した彼女は、一緒に死なせてくれと頼むイスメネを拒否して言う、「だってあなたは生きる途を、私のほうは死ぬ途を択んだのですもの（555）」と。

今や彼女の願いは死ぬことだけである。しかも早急な死を彼女は願う。

Ant. : わたしを捕まえて殺す以上に、何かもっとひどいことをお望みです

の。

Kr. : いや、何も望んでおらぬ。それだけやれば万事終わりだ。

Ant. : ではなぜ躊躇なさるのです。

(497-99)

埋葬禁止令を犯せば石子詰め⁽³⁶⁾の刑で殺されるはずであった。それをクレオンは躊躇する。犯人を捕まえてみれば身内⁽²⁴⁾であったせいか。身内でも容赦はせぬと断言した⁽¹⁸³⁾はずであったが。息子ハイモンの説得と抗議のせいか。第3スタシモンのこのハイモンと対峙する場面のあと、クレオンは刑罰の変更を行う。石子詰め⁽³⁶⁾に代えて、洞窟内の牢獄に命果てるまで僅かな食糧を添えて閉じ込めるというのである^(773ff.)。この変更の持つ意味は小さくない。これは、舞台に登場以来順次露呈されてきたクレオンの政治家としての器量不足の一端^(性格の弱さ)を示すものと見ることもできよう。また別の見方をすれば、これはアンティゴネの、その死によって一挙に上がる市民からの同情と名声とを阻止するための手段とも考えられる。公開の場で時間を置かずに処刑することをせず、幽閉して徐々に殺すという方法は、アンティゴネその人、その生前の行為を風化させるに効力があるからである。とすれば、彼はなかなかの政治家ということになる。彼女を掌中に握ったことになる。

クレオンがどう考えたか、いずれにせよこの刑罰の変更がアンティゴネに与えた影響は大きい。捨て身の死によってこそ得られる、彼らふたりの対立の主導権が相手に移ってしまう。それを取り戻さねばならぬ。そして名誉ある死を得なければならぬ。このまま幽閉され生き晒しになることはとうてい肯い得ない。兄の埋葬をすることは死ぬことであった。埋葬の向こうに死が控えているからこそ彼女は埋葬したのである。それがこの劇の最初からの取り決め、約束であった。埋葬ののちの大団円などあり得べからざることである⁽²⁵⁾。その辻褄が合わない。辻褄合わせをしなければならない。それが自殺である。刑罰の変更は、実にこの自殺への伏線であった。そしてこの自殺

によって、ようやく彼女は己の行為に一貫性をもたらすことになると同時に、クレオンとの主導権争いに勝利するのである。自殺は、最初共同体の法の埒外に出て死を覚悟の上で兄を埋葬することを決意したあの彼女の姿の、少しく廻り道をした上での、しかしまた当然の帰結である。

だがなぜ彼女は死に急いだのか、つまりなぜ埋葬をしようとしたのか、兄ポリュネイケスへの愛のゆえか、いや、ごく普通の死者の霊を祀る敬虔な感情のゆえか、しかし子供や夫が死んだ場合は市民の反感を買ってまで埋葬はしないと明言される。とすればやはりポリュネイケスへの特別な感情のゆえなのか、しかしこの兄妹ふたりの関係は今ひとつ不明である。生前のポリュネイケスに対するアンティゴネの感情は一切明らかにされぬままである。死せるポリュネイケスに対するアンティゴネの打ち込みようは、単なる兄妹愛を越えて近親相姦的な愛すら感じさせるほど異常に強い。しかもそれでいてそこにはなぜか優しさが感じられない。婚約者ハイモンに対して冷淡であると同様に、兄に対しても彼女はその言葉から予想されそうな優しさは、実は持ち合わせていない。少なくともそれが感じられない。死を賭しての埋葬行為こそ愛の証ではないか、と彼女から反論されそうである。しかしそうだろうか。彼女が言う愛とは、むしろ兄への愛に名を藉りた自己愛ではないか。死者への祀りに名を藉りた己の死の準備ではないか。

劇の冒頭からしてすでに アンティゴネの言葉には己の出生への矜持（37-38、また 940-43）と、己の家系でも傍系から思いがけず王位に登った新国王クレオン に対する反発と皮肉（31-32、48）が盛られている⁽²⁶⁾。ここにはあの「神の法」の無差別の絶対性を主張するアンティゴネとは別のアンティゴネがいることが知られるのである。

同時に アンティゴネは現在の己を取り巻く状況に絶望している（1-10）。己の出生を呪うときもある（857ff.）。彼女には婚約者ハイモンという存在があるけれども、しかしその存在は彼女を生の方へ向ける力としては一向に作用しない。彼女がポリュネイケスの死を契機に死を望んでもおかしくない状況が、ここにはある。兄の死及びその埋葬は単なるきっかけにすぎない。

彼女は己のために己の人生を清算したいと思うのである⁽²⁷⁾。誤解を恐れずに言えば、彼女はポリュネイケスを愛していない。それが証拠に、ポリュネイケスとエテオクレスの立場が逆になった場合でも彼女はポリュネイケスを愛したろうか。甚だ疑問である。彼女は彼の死（死せる彼ではない！）を愛したのだ。彼の死を契機として己が死ぬことを、しかも“立派に”死ぬことを⁽²⁸⁾。もちろんハイモンなど愛してはいない⁽²⁹⁾。いやハイモンとポリュネイケスも愛してはいるだろう。ただそれ以上に己を愛しているのである。彼女は、兄のために死ぬと同時に自らのためにも死ぬのである。自殺こそその何よりの証拠であろう。

しかしこのように見てくると、作者の意図は果してどこにあったのか、もう一度見直さねばならなくなってくる。「神の法」の絶対性の主張は、あれは嘘だったのか。嘘ではない。ただ大きな一面であるとはいえ、そればかりがこの劇の意味するものではない。A.ボナールは「ソポクレスの天才と芸術のもっとも著しい特徴のひとつは、登場人物の一人一人の生を我々にじつに身近に体験させることにより、彼らが我々のまえに立って語るとき、みなそれぞれ正しいと思わせずにはおかない点にある」⁽³⁰⁾と言うが、これは一人の登場人物がみせる複数の相貌についても言えることではないか。アンティゴネは決して一面的ではない。さまざまな顔をみせるのである。そしてそのそれぞれがそれぞれの存在感を与える。われわれにはそれが皆ほんとうと思えるのである。第2エペイソディオンで、クレオンとアンティゴネの両者はそれぞれ「人の法」、「神の法」を主張して対立する。しかしそれは単に純粋なイデオロギーの対立とのみとられるべきではない。そこには現世的付随物がいろいろと付着している。ふたりの対立にはそうした眼に見えぬ表面下の暗闘もあるのである。

アンティゴネは決してヒロイズムに酔った跳ね上りではない。跳ね上って殉教者という臭いお芝居をしようとしているわけではない。もっと現実的である。打算はあるが、しかしその死の意志は真摯である。彼女は埋葬し死ぬことによって、兄ポリュネイケスを救い（死者への儀礼）、己を救い（利得

と名声)、クレオンを貶めんとした(家柄への矜持)⁽³¹⁾。それが最後まで死に執着した理由である。

アンティゴネの死はまたさらにふたつの死を招く。ハイモンとエウリュディケそれぞれの自殺である。このふたつの死はクレオンに大きな打撃となる。彼は滅びてゆく。これをもって「神の法」の勝利、「人の法」の敗北と言うは易い。しかしこのふたつを秤にかければ前者のほうが重いに決まっている。そして元来前者は後者の後盾となりこれを補佐し擁護するものではあっても、決して互いに対立しあうものではないはずである⁽³²⁾。クレオンは、決して「神の法」と対立しているつもりはない。共同体のために戦った者を遇し敵対した者を罰するのは、彼の考えでは「神の法」に則ったものなのである。ただこの考えを、彼は最後になって変えてしまった。彼はアンティゴネ同様、その頑迷さを最後まで保持すべきであった。ハイモンの死後、彼は「今こそ悟った(1292)」と言う。悟ってはならなかったのに、だが息子と妻の死はあまりに重かった。ふたりの死ののち彼は急速に墮落し、われわれの興味と同情を失ってゆく。アンティゴネは死して英雄となるが、クレオンは生きて汚辱の徒となる。自らに賭ける頑迷さが足らなかったがために。その怒り易い気質など、彼を破滅に導いたものは多い。だが自らに賭ける頑迷さが足らなかったことこそ、その破滅の最大因ではないか。それは自らの弱さに敗れたと言うのが正しい。

では彼はどう対処すべきだったのか。ただひと言「これでよし」と言うこと、それだけでよかったのだ。それは、これが政治というものなのだ、妻子を犠牲にしたが、しかしおれは国を救ったのだ、という意味である。それが彼の頑迷さの帰結であり、また政治を行う者の当然の態度であるはずである。このひと言で彼はアンティゴネの死に充分対抗し得たはずである。しかし作者ソポクレスにはクレオンをそう描く意図はなかったようである。だがまたそうだからといって、このような結末からこの劇を「神の法」を全的に担ったアンティゴネのクレオンに対する勝利を歌いあげたものと安易に解することはできない。上に述べたのはそのことであつた。

註

(1) これはアンティゴネの、妹イスメネに対する死の勧誘である。埋葬すれば必ず死罪になることを明らかにした上での協力要請であるのだから。アンティゴネは、ポリュネイケスの死を契機に父オイディプスに端を発する一家の汚辱の歴史をここで清算せんと思慮したかの如くである。いずれにせよ、劇は冒頭から死の匂いに満ちている。

(2) 第1の埋葬は夜明け直後、第2のそれは「日輪が中空にかか」る頃というから、ほぼ真昼とみてよい。

(3) Cf. S.M.Adams, *The Burial of Polyneices*, CR 45(1931), pp.110-11, J.Ferguson, *A Companion to Greek Tragedy*, London & Austin, 1972, pp. 168-69, M.McCall, YCS 22(1972), pp.103-17 (未見)。

(4) Adams は『オイディプス王』1258 行以下「狂ったあの方（オイディプス）にどなたか神さまが道を示された....」を、ここと類似の神の介入の例として挙げる。Cf. art.cit., p.111. Kitto は、劇中の現象をあまりに人間の眼から現実的合理的に解釈しすぎる傾向を劇の本質を見失いかねないとして戒める。と同時に、だからといって人間的要素を無視せよというわけではなく、いわばバランスのとれた解釈が必要であるとする。Cf. H.D.F. Kitto, *Form and Meaning in Drama*, Methuen, London, 1956, p.154.

(5) 「お供え」とまで訳すのは訳しすぎかもしれない。規定どおりの埋葬儀式を済ませたとの意である。

(6) Cf. W.H.D.Rouse, *The Two Burials in 'Antigone'*, CR 25(1911), pp. 40-42.

(7) イスメネは単に アンティゴネの引き立て役にすぎないとする説が多い。例えば, Ticho von Wilamowitz-Moellendorff, *Die dramatische Technik des Sophokles*, Weidmann, 1969(1917), S.41, Kitto, op.cit., p.159. これに反対するのは, R.P.Winnington-Ingram, *Sophocles. An Interpretation*, Cambridge U.P., 1980, p.136, W.Jäkel, *Die Exposition*

in der Antigone des Sophokles, Gymnasium 68(1961), S.41 など.

(8) Cf. L.Campbell(ed.), Sophocles, vol.1, Olms, Hildesheim, 1969 (1879), ad 536.

(9) Cf. Campbell, op.cit., ad 558. 但し Campbell は 536 行の内容の繰り返しとするほうがよいとしている。Jebb はこれを第 1 埋葬に参加しなかったものの、姉の行為に同情する点で精神的な同罪者であると解釈する。Cf. R.Jebb, Sophocles, III, Antigone, Cambridge, 1928(1888), ad 558.

(10) 両方の埋葬をいずれもアンティゴネの行為とする評家は多い。G.H. Gellie, J.E.G.Whitehorne, A.O.Hulton, J.L.Rouse, H.D.F.Kitto, M.K. Flickinger, J.Messener, K.W.Meiklejohn, I.Errandonea ら.

(11) Jebb, op.cit., ad 429. また Tovar も同様に仕残した灌奠の儀をすることを理由に挙げる。Cf. A.Tovar, Sófocles Antígona, Madrid, 1962, ad 429.

(12) 川島重成『ギリシャ悲劇の人間理解』新地書房, 昭和 58 年, 104, 105 頁参照。また Campbell, op.cit., ad 43, J.C.Kamerbeek, The Plays of Sophocles, III, Leiden, E.J.Brill, 1978, ad 43.

(13) この弁明として、灌奠に必要な葡萄酒は夜間貯蔵庫に保管されていて簡単に取り出せず、世の引き明けの第 1 埋葬には間に合わなかったというようなことも、考えられないではない (Kitto, op.cit., p.156. 但し Kitto はこれを肯定しているのではない)。しかしこれは、劇中の事象のすべてを辻褄が合うように考えたいわれら現代読者、あるいは古今を問わぬ書斎派の悪癖であって、ここからは劇の正しい解釈は生まれてこぬであろう。また T.v.Wilamowitz は、作者は舞台外の出来事を矛盾せぬよう正確に意味づけるようなことはしていない、裏の事件の詮索よりそのときどきの舞台上の出来事のほうを重要視しているのだと喝破している。Cf. T.v.Wilamowitz, op.cit., S.21, 34.

(14) Cf. op.cit., p.152.

(15) これはのちのアンティゴネの主張する「神の法」に対する彼の態度

とも関係するが、彼は神の行為、神の法そのものに反対するのではない。神がそんなこと（悪人を助けること）をするはずがない、悪人を助けるのが神の行為であるはずがない、と言っているのである。

(16) のちの、息子ハイモンとの対決場面で言及される「男尊女卑」、
「長幼の序」の強調と並んで、この金銭感覚はクレオン像の本質をなすもの
と言ってもよいであろう。Funke は、人間の行為を金銭欲を第1にして認識
しようという狭小で盲目的な態度こそ彼の破滅の遠因であるという。Cf. H.
Funke, Kreon Apolis, Antike u. Abendland 12(1966), S.35.

(17) 第1埋葬はプロロゴスの前にすでになされていたという説がある。
Errandonea がこれを唱える。これより前彼女は埋葬に出掛けたが、一人では
どうてい手に負えぬことを知って妹に助力を求めに館へ帰ってきた。そこ
からプロロゴスが始まるというわけである。これは、第1埋葬の時期をプロ
ロゴス以後と既定事実のように考えているわれわれには意表をつかれる、そ
してまた検討を要する問題提起であると言えよう。その是非はさておき、た
とえそうだとした場合、第2埋葬がアンティゴネの命を賭しての行為であった
という点では、われわれの見解と異なるところはないであろう。Cf. I.S.I.
Errandonea, Sófocles. Investigaciones sobre la estructura dramática
de sus siete tragedias y sobre la personalidad de sus coros, Escelicer,
S.A., Madrid, 1958, p.92.

(18) この問題は、T.v.Wilamowitz の言うような劇構成、劇の存立の点
からのみ論じ尽くすことはできないであろう。アンティゴネが戻ってきた、
すなわち作者が2度の埋葬を設定したことにはもちろん劇構成上の問題が大
きく関わっているが、そこにはまたアンティゴネという人物の性格も関わっ
ていることが指摘されねばならない。この点は Rouse の言うとおりである。
但し、Rouse は第2埋葬との関連でアンティゴネの性格をその「強さ」にの
み求めようとするが、逆に第1埋葬と関わるその「弱さ」がもっと指摘され
て然るべきではないか。Cf. T.v.Wilamowitz, op.cit., S.33-34, J.L.
Rouse, The Problem of the Second Burial in Sophocles' Antigone, CJ

47(1951-2), pp.220-21.

(19) 492, 531行でクレオンは館内のイスメネの行状を描写している。そこでイスメネだけが触れられていてアンティゴネの情報が欠落している点から、却ってアンティゴネが館内にいなかったとも推定できる。Cf. T.v. Wilamowitz, op.cit., S.33. もちろんいたかもしれない。その場合は、彼女の情報は舞台上の事件と無関係とみなされて省略されたのである。だがこれは単純に無関係とも言えない。彼女の消息は観客も気になっていたはずである。

(20) Rouse は第2埋葬へ赴くアンティゴネに「強さ」を求めようとする。それは、性格の強さ、愛、忠誠心の強さ、家族愛、兄の埋葬への義務感の強さである。Rouse, art.cit., p.221 また註(18) 参照。しかし理由はそれだけではない。ここに挙げたような現実的理理由も介在しているのである。

(21) かの Goethe をはじめとして W.Schmid, C.H.Whitman, D.L.Page ら。そのまま認めようとするのが G.Kaibel, T.v.Wilamowitz, C.M.Bowra, Errandonea ら。Kitto は、アンティゴネの言辞に一貫性を求めようとするのは無いものねだりであると一蹴する。Cf. Kitto, op.cit., pp.170-71.

(22) この合唱隊の言葉は「神の法」を主張するアンティゴネに対して言われたものである。このことは「神の法」思想が合唱隊には一顧だにされていないことを示している。彼女のせつかくの高邁な主張がさっぱり効果ない。松永雄二「劇“Antigone”の統一性についての一つの覚書」『西洋古典学研究』IV, 岩波書店, 昭和31年, 20頁, 殊に註(28) 参照。

(23) ここでもどこでも、劇中アンティゴネはその行動に関して婚約者のハイモンに相談することは一切ない。その名は口の端にすら上がらない。舞台上ではすれ違って遭うこともない。このことは象徴的である。すなわち、埋葬を決意したときから生につながるハイモンとの関係を、彼女は自ら断ち切っているのである。

(24) Cf. D.A.Hester, Sophocles the Unphilosophical, Mnemosyne IV. 24(1971), p.33.

(25) 川島は、幸せに生き延びるアンティゴネを醜悪と評し、そのようなアンティゴネは存在しないという。川島、上掲書、118 頁参照。ただし、これだけでは彼女の自殺は説明されないであろう。後述するように、己の醜悪さを払拭すると同時に、それはクレオンへの打撃を意図したものと考えられねばならない。

(26) クレオンのほうでもこうした雰囲気は薄々感じていたらしいことは、アンティゴネ、イスメネのか弱い姉妹を本気で敵に算え入れるというその言動（531-35）から推測される。

(27) 竹部もアンティゴネの死の問題を（アヌイの『アンチゴヌ』と比較しながら）次のように言う、「さまざまの悪の中にある en polloisin kakois くらいなら、むしろ死の方が利益 kerdos であると言うアンチゴネーの表明の中に、この世間の不純さに叛逆し絶望し、死を決意するフランスのアンチゴヌの原型が見出せないか？ ギリシアのアンチゴネーも別の言葉で、この世界を拒絶しているのだ。そのための手段として神の法や埋葬が持ち出されているのではないか」と。竹部琳昌「アヌイの『アンチゴヌ』における問題性」『同志社大学人文学』、第 116 号（23）、1970年。

(28) この傍証として次のものを挙げておきたい。「もしポリュネイケーヌ埋葬の禁止令がなければ、アンティゴネーは他の禁を破って、死を求めたにちがいない」。毛利三彌「アンティゴネー私見——英雄的性格の孤高さ——」『ギリシャ悲劇研究』2、昭和 34 年、90 頁。

(29) ハイモンへの愛を語る唯一の章句とされる 572行は写本どおりイスメネの台詞として読む。またそうすれば一行対話 stichomythia の約束を破らずとも済む。

(30) A. ボナール（岡、田中訳）『ギリシア文明史』Ⅱ、人文書院、昭和 50 年、33 頁参照。

(31) アンティゴネは死ぬことによってテーバイというポリスを穢れから救ったのだとする説がある。しかしこれは結果としての話である。彼女にその意図があったわけではない。これについては、岡道男「アンティゴネとク

レオン」『古代文化』第 38 巻 第 7 号，昭和 61 年，4-5 頁参照。

(32) このことはギリシアの思想家たちの言説にしばしば見られるところである。たとえばプラトン『法律』7.793a， トウキユディデス『歴史』2.37.3 など。 松永，上掲書，18 頁参照。